

ふらべじ

Flower & Vegetable

Vol. 19 2002
雁 の 号
12.5

発行 北海道立 花・野菜技術センター



たまねぎ *Allium cepa*

‘*cepa*’ は頭を意味し、明治時代に導入したときには「葱頭」と言っていたようです。北海道は全国の半分を生産しますが、その半分は北見地方で生産される全国一の大産地となっています。最近、価格が低迷しており、今年は約5万トンも廃棄されました。血栓防止など健康野菜として注目されており、安いたまねぎをどんどん食べて欲しいものです。

花・野菜技術センター / 植物遺伝資源センター

公開デー 2002

花・野菜技術センターと植物遺伝資源センター共催による公開デーが8月29日に開催されました。7回目を迎える今回は天気にも恵まれ、平日にもかかわらず850人の来客者でにぎわいました。



近所の小学校からもたくさんのお客さんが。



「これなあに？」初めて見るヤーコンに興味津々？



当センター育成メロン「空知交11号」の試食です。



植物遺伝資源センターからは貴重な遺伝資源を公開。



新技術フィールドセミナー。みなさん真剣なまなざしです。



雪を利用した冷房装置。真夏の雪に子供達もびっくり！



鉢上げした苗はそのままお持ち帰り。上手に育ててくださいね。



野菜の苗当てクイズ。職員でも分からない？



フラワーデザインセミナー。満員御礼です。



圃場管理には欠かせない機械類も一挙公開。



当センターの職員が開発した新型のマルチ穴開け器。



職員が圃場施設を案内。農家のお客様からは質問も飛び交いました。

畦畔に適したグラウンドカバープランツを探しています(花き科)

近頃、環境づくりも兼ねて畦畔に景観作物の栽培を希望する農家が多くなってきました。しかし、品目の選定や定植後の維持管理に手間がかかるために栽培を見合わせる農家が多いというのが現状です。地域的に景観を整備するためにはある程度の面積を確保することが重要で、希望する農家が簡単に栽培できる環境作りが必要です。こうした中でグラウンドカバープランツは畦畔害虫の生息数を減少させる効果も期待され、クリーン農業を展開する上でも重要視されています。



圃場ののり面を利用した調査



グラウンドカバープランツは最近の園芸ブームで数多くの品目が導入されています。しかし、グラウンドカバープランツ自身の雑草化など生態系への影響についてはまだ検討されていません。また、北海道のような寒冷地に適した品目についてもほとんど検討されていません。研究に対するニーズも多くの地域から要望があり、平成13年度より当センターで取り組みを始めました。

取り組み内容について、場内ではグラウンドカバープランツの収集と被覆のスピード、永続性、増殖方法などの調査、また、美唄市では新規造田畦畔でのミント植栽の効果について検証しています。

美唄市では実際に水田の畦に定植して調査を行っています

たまねぎの輸入対策 (たまねぎセミナーから)

近年の中国産野菜の急増は顕著で、たまねぎでもこの3年間で数倍の伸びとなっています。市場価格は再生産価格と言われる75円/kgを常時割り込むようになり、北海道では約5万トンもの産地廃棄が実施され、生産者の危機意識はかつてないものとなっています。先日、北見農試が主催した「たまねぎセミナー」が開催されました。私も「輸入対策：過去の経験と今後の戦略」を発表しました。紙面の都合で簡単な要約だけを記します。「農家の友の2月号」に内容が掲載される予定ですので、そちらの方もご覧下さい。

輸入対策の経験：十数年前に市場価格の暴騰をきっかけに、米国などから大量に輸入され価格が低迷しました。その対策として、私は市場価格1,500円/20kg以下でも生産できる低コスト化を提唱し、生産者から「無理だ！」と非難されたものですが、現在ではほぼクリアしているといえます。今回の中国対策では、1,000円/20kg近くまでコスト低減を目指す必要があると提唱しました。

対策の主流は多収：コスト低減のためには流通コストの低減、不耕起栽培など省力栽培法の開発、施肥法の改善、農薬など生産資材の低減などがありますが、これに加えて多収による生産コストの低減があります。豊作年の本年でも6t/10a程度ですが、8t/10a近くまで増収になれば200円/20kg程度の生産費が低減される計算です。どのようにして多収を達成するのかいくつか例を挙げましたが、もっとも可能性の高いのは排水対策を含めた土地改良と大苗の早期移植ではないかと思われまます。現在でも、圃場によってはすでに8t/10a近くの反収があることを思えば、決して不可能な数字ではないと思っています。セミナーではそんなにとれては困るような意見も出ましたが、生産性の高い圃場の精査を元にした生産調整と栽植本数の増減による球肥大の調整などによってコントロール可能と考えています。

さて、皆様のご意見はいかがでしょうか？ (場長 宮浦邦晃)

平成14年度総合技術研修が 修了しました

4月から実施していた総合技術研修が修了を迎え、5月からの専門技術研修と併せて修了式を開催しました。

はじめに専門技術研修成果発表及び各研修生の報告があり、宮浦場長の祝辞について、全員に知事からの修了証書が交付されました。

修了後の進路は、自宅で営農される方、新規就農に向けてさらに研修される方と様々ですが、センターでの経験とネットワークを活かしていただけるものと期待されています。

今年度の研修活動の様子は当センターホームページの「The 研修 Now」で公開しています。



職員と記念撮影。研修ご苦労様でした

海外研修生との交流を行いました

JICA(国際協力事業団)からの委託で7月下旬から10月上旬に渡って海外からの研修生を受け入れました。

今年の研修は全3回でエ



ルサルバドルから3人、マラウイから2人の農業改良普及員が、中国からは1人の研究員が当センターで短期研修を受けました。

研修中は各国の農業事情について意見を交換したり、また視察先では熱心に説明に耳を傾けていました。



平成15年度花き・野菜技術研修 (専門技術研修・総合技術研修) 募集要領

平成15年度専門技術研修および総合技術研修の募集を開始します。

(1) 専門技術研修

高度な専門技術を有する生産者や技術指導者の養成を目的に、道立花・野菜技術センターにおける試験研究品目から研修課題やテーマを設定の上、担当する研究員等による個別指導をつうじて課題解決や各種技術の習得を図ります。

コース	花き栽培、野菜栽培、病害虫、 土壌肥料
研修期間	1年以内の範囲で任意に設定
募集人数	各コース2名程度
応募期間	平成15年1月15日(水)から 研修の開始の原則1ヶ月前まで

(2) 総合技術研修

総合技術研修は、花き・野菜の実践的な技術を有する生産者の育成を目的に、花きと野菜のコース別に、北海道立花・野菜技術センターが定めるカリキュラムに基づき、講義、実習、栽培及び視察研修などをおして基礎理論から実践技術までを体系的に指導します。

花・野菜技術センターの研究員、専門技術員及び外部講師による指導の他、経験豊富な専任スタッフが研修全般をバックアップします。

コース	花き、野菜
研修期間	平成15年4月16日～10月10日
募集人数	花き5名、野菜10名
応募期間	平成15年1月15日(水)から 3月14日(金)まで

詳細については当センターホームページもしくは技術普及部主査までお問い合わせ下さい。

北海道立 花・野菜技術センター

〒073-0026 北海道滝川市東滝川735番地
Tel 0125-28-2800 FAX 0125-28-2299

www.agri.pref.hokkaido.jp/hanayasai/index.htm

E-mail hana_yasai@agri.pref.hokkaido.jp